

ASHUREY CLASS

2024

受難週の瞑想

No.2 2024. 3.25

「受難週の瞑想」をする上で大切な視点

【新改訳2017】 マタイの福音書4章17節
この時からイエスは宣教を開始し、
「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」と言われた。

- イエシュアの公生涯での一切の言動は、徹頭徹尾「御国の福音」です。イエシュアの語ったことばとなされた奇蹟は、すべて御国のデモンストラーションです。「御国」(マルフォト)はメシアが統治する国であり、その到来には、「すでに」と「いまだ」の緊張関係にあります。
- イエシュアの口から出る一つひとつのことばは「霊であり、いのち」です。しかも、それは預言的であり、奥義的であり、重層的 です。

1. テキスト ①

- 「受難週の瞑想」の第二回目は、エルサレムの宮の中でイエシュアがなされたことから、三つのこと(宮きよめ、いやし、メシア王国)を取り上げます。

【新改訳2017】 マタイの福音書21章12～17節

- 12 それから、イエスは宮に入って、その中で売り買いしている者たちをみな追い出し、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒された。
- 13 そして彼らに言われた。「『わたしの家は祈りの家と呼ばれる』と書いてある。それなのに、おまえたちはそれを『強盗の巣』にしている。」
- 14 また、宮の中で、目の見えない人たちや足の不自由な人たちがみもとに来たので、イエスは彼らを癒やされた。
- 15 ところが祭司長たちや律法学者たちは、イエスがなさったいろいろな驚くべきことを見て、また宮の中で子どもたちが「ダビデの子にホサナ」と叫んでいるのを見て腹を立て、
- 16 イエスに言った。「子どもたちが何と言っているか、聞いていますか。」イエスは言われた。「聞いています。『幼子たち、乳飲み子たちの口を通して、あなたは誉れを打ち立てられました』とあるのを、あなたがたは読んだことがないのですか。」
- 17 イエスは彼らを後に残し、都を出てベタニアに行き、そこに泊まられた。

1. テキスト ②

●12節に「それから」とあるので、イエシュアの「宮きよめ」がエルサレムに入場された後にただちに行われたと私たちは考えますが、並行記事であるマルコ11章11～13節、および15節を見ると、エルサレム入場の翌日であったことが分かります。さらに「宮きよめ」の前に「いちじくの木を枯らす」出来事が挿入されています。

【新改訳2017】マルコの福音書11章11～13, 15節

- 11 こうしてイエスはエルサレムに着き、宮に入られた。そして、すべてを見て回った後、すでに夕方になっていたので、十二人と一緒にベタニアに出て行かれた。
- 12 翌日、彼らがベタニアを出たとき、イエスは空腹を覚えられた。
- 13 葉の茂ったいちじくの木が遠くに見えたので、
- 14 するとイエスは、その木に向かって言われた。「今後いつまでも、だれもおまえの実を食べることがないように。」弟子たちはこれを聞いていた。
- 15 こうして彼らはエルサレムに着いた。イエスは宮に入り、その中で売り買いしている者たちを追い出し始め、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒された。

1. テキスト ③

● 「いちじくの木を枯らす」出来事は、マタイではマルコとは逆に、「宮きよめ」の後に、しかも翌日に、と記されています。このように、日付だけでなく、出来事の順序が逆になっているのに気づきます。これはユダヤ的思考の特徴なのです。西洋的思考は時系列を大切にいますが、ユダヤ的思考は出来事そのものを重要視します。ヨハネ文書ではその特徴は顕著です(福音書、黙示録)です。そのことを踏まえると、「宮きよめ」と「枯れたいちじくの木」の二つはワンセットの出来事だと理解できるのです。この二つの出来事は、「神の訪れの時を知らなかった」当時のエルサレムの現実をよく表している話なのです。

1. 宮きよめ(12～13節)

2. 目の見えない人たちと足の不自由な人たちのいやし(14節)

3. 祭司長たちと律法学者たちに対して語った詩篇8篇の意味(15～16節)

2. 宮きよめ ①

【新改訳2017】 マタイの福音書21章12～17節

12 それから、イエスは宮に入って、その中で売り買いしている者たちをみな追い出し、両替人の台や、鳩を売る者たちの腰掛けを倒された。

13 そして彼らに言われた。「『わたしの家は祈りの家と呼ばれる』と書いてある。それなのに、おまえたちはそれを『強盗の巣』にしている。」

●イエシュアは商売人たちと両替人たち、そして羊も牛も、宮から追い出しています。マタイは「『わたしの家は祈りの家と呼ばれる』と書いてある。それなのに、おまえたちはそれを『強盗の巣』にしている。」とあるのに対して、ヨハネは「わたしの父の家を商売の家にしてはならない」とあります。いずれにしても辛辣です。宮(神殿)をきよめようとするイエシュアの行為に対して、宮を神聖視しているユダヤ当局がそれを黙って見過ごすことはありません。エルサレムに入ったイエシュアの言動の一つ一つが、ストイケイアとの戦いを意味しています。それは神とサタンとの激しい戦いが始まったことを示しているのです。

2. 宮きよめ ②

●イエシュアは商売人と両替人たちに、宮を「強盗の巣にしている」と言いました。彼らは当時の祭司長、祭司たちと親戚関係にあったことから、イエシュアの彼らに対する言動は、むしろ祭司長や祭司たちに対する批判をしたこととなります。

●「強盗」(原文は複数)は「無法な者」とも訳されます。エゼキエル書7章22節に、「わたしは彼らから顔を背け、わたしが秘宝とする所は汚される。無法者がそこに入り込み、そこを侵す」(新改訳2017)とあります。「わたしが秘宝とする所」とはエルサレム神殿のことで、エゼキエル書では「無法者(バビロンの兵士たち)によって神殿は汚されること」、バビロンの捕囚時に神殿の宝物が略奪されることを意味しています。それと同じ運命にあることをイエシュアは知った上で、このことばを使ったのです。

●エルサレムの神殿は祭司集団の利得をむさぼる「巣窟」となっていました。それを強盗の「巣」とイエシュアは言ったのです。神のご計画において、やがてそこが「祈りの家と呼ばれる」と預言しているのです。旧約で「祈りの家」は1回しかなく、特別なことばです。それは教会のことではなく、「メシア王国の神殿」なのです。イエシュアはそのことばを用いて、ここで語っているのです。

2. 宮きよめ ③

●イエシュアが語られたマタイ21章13節の「『わたしの家は祈りの家と呼ばれる』と書いてある」ということばは、以下の、イザヤ書56章7節のことばです。

「わたしの聖なる山に来させて、わたしの祈りの家で彼らを楽しませる。彼らの全焼のささげ物やいけにえは、わたしの祭壇の上で受け入れられる。なぜならわたしの家は、あらゆる民の祈りの家と呼ばれるからだ。」

●イザヤ書56章1～8節の預言は、メシア王国における異邦人たちに対するものです。これは、教会が携拳されたのちに救われる異邦人(諸国民、異国の民、疎外された宦官)に対する預言であり、この者たちを「わたしの聖なる山」、すなわちエルサレムに連れて来て、「わたしの祈りの家で彼らを楽しませる」という預言です。「すでに集められた者たちに、わたしはさらに集めて加える」(8節)とあるように、イスラエルの残りの者だけでなく、彼らによって救われた異国の民も救いに加えられて、「わたしの家で彼らを楽しませる」、しかも「(わたしの)息子、娘にもまさる記念の名を与え、絶えることのない永遠の名を与える」という祝福、それが神のご計画なのです。このように、イエシュアのことばはまさに預言的、奥義的です。

2. 宮きよめ ④

●にもかかわらず、当時の祭司たちはその神のご計画を無視し、それから外れたゆえに「あなたがたはそれを強盗の巣にした」と糾弾されているのです。つまり、宮の境内で商売や両替をして暴利を貪り、神にささげるべきものによって私腹を肥やしていたのです。それはまさに神のものを盗むことに等しいことでした。そうした背景を許しているユダヤ教の支配体制(ストイケイア)がありました。制度化された支配体制のもとで胡坐(あぐら)をかき、「祈りの家」を「強盗の巣」にした者たち—祭司長、祭司たち—は、宗教を食べ物にしていたのです。商売人も両替人もすべて祭司階級の者たちと結びついていた者たちなのです。当時の祭司たちの支配体制は、今日で言うところの「一党独裁的支配」だったのです。パリサイ派の律法学者たちとサドカイ派の祭司たちとは、律法についてのその立場や考え方は異なっていましたが、自分たちの利権においては暗に認め合っていました。ですから、エルサレムを訪れたイエシュアに対して、双方が協力して真っ向から対決することができたのです。彼らはイエシュアに「腹を立てた」だけでなく、宮きよめの出来事を契機として、イエシュアをいかにして殺そうかと本格的に相談しはじめたのです。

2. 宮の中での「いやし」 ①

●イエシュアの公生涯三年半のガリラヤ伝道において、イエシュアは自分のもとに来た多くの病人たちを癒やしましたが、それは御国の到来のデモンストレーションでした。そのことをエルサレムでも証しする必要がありました。14節がそのことについて記しています。

【新改訳2017】マタイの福音書21章14節

また、宮の中で、目の見えない人たちや足の不自由な人たちがみもとに来たので、イエスは彼らを癒やされた。

●メシアが支配する王国では、「目の見えない人たち」も「足の不自由な人たち」も存在しません。イザヤ書35章にはそのことが預言されています。

【新改訳2017】イザヤ書35章5～6節

5 そのとき、目の見えない者の目は開かれ、耳の聞こえない者の耳は開けられる。

6 そのとき、足の萎えた者は鹿のように飛び跳ね、口のきけない者の舌は喜び歌う。
荒野に水が湧き出し、荒れ地に川が流れるからだ。

2. 宮の中での「いやし」 ②

●イザヤ書35章5節、6節にある「そのとき」とは、「終わりの日」、つまりメシアが地を支配する千年王国の時です。また6節にある「水」と「川」は「聖霊」を象徴しています。メシア王国の特徴は爆発的な喜びです。「目の見えない者」「耳の聞こえない者」「足の萎えた者」「口のきけない者」はすべて複数形です。これらは、基本的にイスラエルの民とその霊的状态を表しているのです。したがって、マタイ21章14節の「目の見えない人たちや足の不自由な人たち」に対する癒やしは、イスラエルの民たちに対する預言的な行為なのです。

●イエシュアのいやしのわざは、使徒たちにも引き継がれます。使徒3章参照。そこでの「生まれつき足のきかない男」が、イエシュアの御名によって、「躍り上がって立ち、歩き出した。そして、歩いたり飛び跳ねたりしながら、神を賛美しつつ二人と一緒に宮に入って行った」という記述には、イスラエルの民がイエシュアの御名によって、メシア王国に入っていくという預言的デモンストラーションだったのです。

3. 「詩篇8篇の意味」 ①

【新改訳2017】 マタイの福音書21章15～16節

- 15 ところが祭司長たちや律法学者たちは、イエスがなされたいろいろな驚くべきことを見て、また宮の中で子どもたちが「ダビデの子にホサナ」と叫んでいるのを見て腹を立て、
- 16 イエスに言った。「子どもたちが何と言っているか、聞いていますか。」イエスは言われた。「聞いています。『幼子たち、乳飲み子たちの口を通して、あなたは誉れを打ち立てられました』とあるのを、あなたがたは読んだことがないのですか。」

● 「宮の中で」起った第三の出来事は、祭司長たちや律法学者たちが「腹を立てた」ことです。「腹を立てた」理由は二つあります。一つはイエシュアがなされたいろいろな驚くべきことを見たことと、子どもたちが「ダビデの子にホサナ」(=「ダビデの子よ、どうぞ救ってください」の意)と叫んでいるのを見たからです。この「腹を立てる」は「激昂する、憤慨する、非常に不愉快になる」という意味です。ヘブル語の「ハーラー」(הָרָה)がそれに相当します。自分のささげものに神が目留めてくれなかったことで「激しく怒った」カインですが、最初の殺人が起こった背景にあったのがこの「怒り」なのです。

3. 「詩篇8篇の意味」 ②

● どうして彼らが激しく怒ったのでしょうか。彼らがイエシュアに「子どもたちが何と言っているか、聞いていますか」の問いに、イエシュアは「聞いています」と答えられただけでなく、逆に詩篇8篇の中の一節である「**幼子たち、乳飲み子たちの口を通して、あなたは御力を打ち立てられました**」を引用して、あなたがたはこれを読んだことがないのですかと尋ねています。

● 一節が引用されていますが、この一節だけが大切なのではなく、この節が含まれている詩篇全体を指して言っているのです。その詩篇8篇とはメシア詩篇です。この詩篇8篇には「**二つの特異なフレーズ**」があります。一つは「**幼子たち 乳飲み子たちの口を通して あなたは御力を打ち立てられました**」(2節)というフレーズ。もう一つは「**あなたは 人を御使いよりわずかに欠けがあるものとし これに栄光と誉れの冠をかぶらせてくださいました**」(5節)というフレーズです。この二つのフレーズを考えてみましょう。

3. 「詩篇8篇の意味」 ③

(1) 「幼子たち 乳飲み子たちの口を通して あなたは御力を打ち建てられました」

● 「幼子たち 乳飲み子たち」とは、イエシュアの弟子たちのことを預言した比喩的表現です。イエシュアがこの世に来られた時、多くの奇蹟を通して自分がメシアであることを示そうとしました。ところが、ガリラヤに住む多くの人々はその奇蹟を見ても信じようとはしませんでした。そこでイエシュアは祈りの中でこう言いました。

【新改訳2017】 マタイの福音書11章25～27節

25 そのとき、イエスはこう言われた。「天地の主であられる父よ、あなたをほめたたえます。あなたはこれらのことを、知恵ある者や賢い者には隠して、幼子たちに現してくださいました。26 そうです、父よ、これはみこころにかなったことでした。

27 すべてのことが、わたしの父からわたしに渡されています。

父のほかに子を知っている者はなく、子と、子が父を現そうと心に定めた者のほかに、父を知っている者はだれもいません。

3. 「詩篇8篇の意味」④

●25節の「これらのこと」とは、数々の奇蹟や数々のことばを通して現わされた「御国の福音」のことです。この福音は「知恵ある者や賢い者には隠して」とあるように、だれでも理解できるものではなく、選ばれた者以外には分からないのです。その選ばれた者とはイエシュアの弟子たちのことを意味しますが、イエシュアは彼らのことを「幼子たち」と言ったのです。マタイ21章では「子どもたち」ですが、その子どもたちが、メシアがだれであるかを悟って、「ダビデの子にホサナ」と叫んでいたのです。

(2) 「あなたは人を御使いよりわずかに欠けがあるものとし・・・てくださいました」

●「人」(原文では「彼」)のことを「御使いよりわずかに欠けがあるもの」と表現しています。「わずかに」と訳されたことばは「少し」という意味と、「わずかの間」という意味があります。ここでは後者の意味で理解すると分かりやすいです。というのは、詩篇8篇5節がヘブル人への手紙2章7節に引用されており、そこでは「わずかの間」と訳されているからです。

3. 「詩篇8篇の意味」 ⑤

● 「人」、メシアなるイエシュアは地上においてわずかの間、御使いと比べるならば「不足した、限定された存在」でした。とはいえ、十分に天の父を啓示されたのです。肉体をもっていたことが、ある意味で「限定されていた」という意味です。にもかかわらず、復活と昇天、そして再臨される時には、「あなたの御手のわざを人に治めさせ万物を彼の足(原文は「両足」)の下に置かれる」存在となります。つまり、詩篇8篇5節はイエシュアの初臨を表し、6節はイエシュアの再臨を表しているのです。

● 神のご計画は、人を通して神を表現し、地を支配することです。詩篇の作者ダビデは神の本来のご計画と目的がこの地において実現した光景を、啓示によって知り、「主よ 私たちの主よ あなたの御名は全地にわたりなんと力に満ちていることでしょうか。あなたのご威光は天でたたえられています」(1, 9節)と感嘆の声を上げているのです。

3. 「詩篇8篇の意味」 ⑥

●それは、人によって「地を支配する」ことが成就していることを信仰の眼で見たからです。しかし、地において「あなたの御手のわざを人に治めさせ万物を彼の足の下に置かれました」ということばはいまだ実現していません。しかし将来、神の似姿に造られた人が、全地である「海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地の上を這うすべてのものを支配する」ようになるのです、神は人に「地を治める」(創世記1:26)ことを必ず実現させます。そのために「最初のアダム」の失敗を踏み直す人、「最後のアダム」(メシア)が必要なのです。それゆえ、宮の中で子どもたちが「ダビデの子にホサナ」(=「ダビデの子よ、どうぞ救ってください」の意)と叫んでいるのは、的を射たことであり、しかも預言的な行為であったのです。

今回の瞑想のまとめ

●「受難週の瞑想」第二回目は、エルサレムの宮の中でなされたイエシュアの三つの言動について学んできました。イエシュアの三年間の公生涯において語って来られた「御国の福音」が、凝縮されたかたちで語られ、かつなされているのです。

●このように受難週を丁寧に瞑想することで、「私のために」というセンチメンタルなイメージが違って来ないでしょうか。神のご計画が実現するために、まさに「神とサタン」「霊と肉」の激しい戦いのドラマが、最後の「エルサレムでの一週間」の中に、凝縮された形で展開されているのです。